

自然とその倒錯——黒田喜夫の離接的綜合

松本 潤一郎 MATSUMOTO, Jun-ichiro

わたしの故郷を救ってください——江代充『黒球』
 反響するな、われわれはついに／反響するな／露出せよ——稀川方人『封印』

〔※本稿は当初、某誌のために二〇〇九年六月から八月にかけて執筆され、構想・推敲の稚拙・未熟ゆえに私の判断で掲載を断念した草稿の改稿である。度重なる改稿を経た今なお忸怩たる思いに囚われているが、来るべき黒田喜夫（再）読解に向け、完膚なきまでに破壊さるべき叩き台として、この場をお借りし、ひとまきまで破壊さるべき叩き台として、この場をお借りし、ひとまず、江湖に問わせていただくことにした。『ゲストハウス』編集同人に熱く篤く感謝いたします。——二〇〇九年九月四日投稿者記〕

はじめに

今、黒田喜夫（一九二六—八四）の思考が読み返されるべきである。

黒田喜夫は東北の農村に生まれ、小学校卒業後上京し、京浜工業地帯で働きながら、その詩作において、やがて病に蝕まれる己の身体から聴こえてくる微かな聲、幻聴、幻覚にじつと耳を澄ませ、見つめ続け、そこに畳み込まれた己以外の無数の聲や光景を見分け、聴き分け、静かに、しかし鮮烈に迸る死の予感を、獣たちの叫びや虫たちのざわめきが放つセクシュアリティとともに歌い、孤絶した人間の生や孤立した政治的いなみの悲喜劇をどこまでも冷静に、しかしどこか狂気を孕んだ筆致で綴った。大野新は、病を被った黒田喜夫の身体とその詩作とを、友の視点

から印象的に描く。「再手術した背中の穴がふさがらず、毎日、脱脂綿をそこに押しこむ、ということが続いていたのである。「生身のからだを、看護婦がじゃけんにあつかう」と彼はしんから辛そうに云っていた。ある日、看護婦がきたとき、ぼくはそこに居合せて、はだかになった彼の背中を見、あわてて眼をそらせてしまった。大きな唇をひらいたように背中に穴があいていて、臆病なぼくは、その火口壁のような肉のもり上りの、暗い中までのぞきこむことはできなかった。（原文改行） 共産党の方針に、新日本文学会の党員が対立する問題が起きた頃で、ぼくも黒田君も一緒に党から離れることになったのだが、彼が病室で書いた「除名」という詩にあるように、そのとき、肉体の苦痛の上に、さらに政治的な圧力も、残酷にかぶさっていたのである。——それからは、彼の新しい詩を読むたびに、ぼくはあの「肉体の暗い穴」をのぞきこむような気がしてならない」。この唇を開いたような身体にいた穴から、黒田喜夫の思考そして言葉は、出てくる。そして、この国における近代に翻弄され崩壊した（村）と、そこで発狂し、餓死し、或いは自死した人びとに対するかなしみと苦しみと怒りと共感から発する、言語表現と人間の生とをめぐって、己の内側に潜む異物を組み伏せるようにして繰り返される、ほとんど無限の対話に裏打ちされた、どこまでも晦渋にして明澄

な文体で、粘り強く繊細に思考した。人間の労働力の商品価値が下落し、生きることがほとんど擲り殺されることと等しい現在において、それでもなお（生きる）ことを渴望する人に、ここで私は、私の黒田喜夫を提示する。とは言えその詩作には触れず、ただ、商品が溢れ返るスペクタクルな消費の光景の中で絶望の叫びをあげ、そして潰えてゆく（派遣）労働者をはじめとした、今日の無数の身体から（故郷）（還る場処―自然）――後に見る通り、それは不自然に抗う反自然としての自然（死）である――の観念を立ち上げさせる黒田喜夫の表現論を、以下で追ってみたい。

反自然としての餓死

朝鮮人を庇い、共産主義的活動を行った廉で特高警察に逮捕され、拷問され、敗戦間近に獄で殺された私の祖父の死因は、当時の祖父を知る人びとから得た証言による限りでは、餓死であつた。ここから分かることの一つは、飢餓とは自然の事象ではなく人為であり、国家装置を介した権力の政治的表現だということである。自然／人間という分割の人為的性質が明らかとなる。ここで自然とは人間的な自然、少なくとも人間に対して／にとつての自然である。この分割を行ったのは自然ではなく、人間である。この不自然な、むしろ反―自然としての餓死は、今日においてもなお生起している。たとえば二〇〇九年一月一六日、大阪市住吉区荊田のマンションの一室で、元派遣社員とみられる四九歳の無職男性の死体が見つかった。死後約一ヶ月が経過し、栄養失調状態であつた。住吉署によると、室内にあつた所持金は九〇円で、冷蔵庫は空だつた。胃にはほとんど何も残っておらず、収入を失くして餓死した可能性があるという。一日、マンション関係者が三ヶ月滞納していた家賃を請求するために訪れ、男性を見つけた。

人間が死ぬのは死ぬべき存在だからではない。人間は十分な糧食がないがゆえに死ぬのであり、獣のように扱われるがゆえに死ぬのであり、そして誰かに殺されるがゆえに死ぬのである。だから自然とは人間が倒錯的に生産した範疇の一つである。いわゆる初期マルクスの『経哲草稿』

に読まれる通り、一見したところ、たしかに人間は自然から疎外されているように思われる。しかしここで確認されるのはむしろ、「疎外」という名の下に行われた、人間による自然の倒錯的生产である。今日ではほとんど省みられなくなった黒田喜夫の思考が召喚されるのは、ここである。

「疎外」は黒田喜夫の思考を構成する語彙の一つである。みずからの労働力を商品化するために農村を出て都市を彷徨する人びとの生と死を思考し、詩作し続けた彼の文章の多くに、この言葉は散見される。にもかかわらず黒田喜夫は疎外状況の克服を説いてはいない。いや、正確には、たしかに疎外の克服が模索されてはいるかもしれないにせよ、しかし、その克服には或る振れが孕まれている。と言うのも、疎外されたものがそこへと回帰してゆくところの自然なるものが人為的なものであることを、黒田は身を以って感受していたからである。ゆえに疎外の克服とは、自然への回帰ではなく、そもそも不自然なものである自然をさらに反転ないし再倒錯させた上で出現する自然、反―自然の創出であることになる。ここに、反―自然としての餓死を思考し続けた黒田喜夫が召喚されるべき、私にとつての理由がある。黒田喜夫の思考の存立性は、このような擬似的自然を産出しては他ならぬみずからを束縛・抑圧してやまないという、人間の――ほとんど本性的とも言いたくなる――隷属への意志と機制の袂出にあつたと思われる。その意味では、黒田喜夫は、「なぜ人間は隷従することをみずから意志するのか」という視点から人間を観察し続けたスピノザと、その思考の外延を等しくする。

糧食をも含めた大量のモノが溢れ返る今日のこの国においても、餓死は消えない。なぜか。餓死は人為的現象だからである。この場合、貧困は資本や生産手段の過剰に由来する。失業者の増大は、大量の消費財の現前と矛盾しない。溢れ返る商品の只中に、餓死の身体が埋もれている。「大量のモノが溢れ返っている、にもかかわらず、餓死がある」のではない。糧食もまた、ここでは商品にすぎないからである。「自然」に最も近いと思われる糧食もまた、例えば文化人類学者レヴィ―ストロースが

論じた文化（人類学）的事象としての「食卓作法の起源」とはやや別の意味において、ここでは人為の度合を限りなく高めている。したがって、流通する商品の膨大な集積と餓死との間には、矛盾と呼ばれる関係さえ成立しない。ここで商品の過剰と餓死とは、たんに並列されている。「大量のモノが溢れ返っている、そして／＼と、餓死がある」。それらは無関係であり、非関係の関係である。今日、黒田喜夫の思考が再導入されるべきだとすれば、それは、この両項を非関係のまま、すなわち肯定的に接続させるためである。糧食をも含めたモノを得るには、資本主義が配備する回路——労働力の商品化——に入ってゆかねばならない。ところで資本が過剰であれば、労働力をも含めた商品は売れ残り、消費されない。したがって、モノの氾濫とモノを得られず死んでゆく者たちとの間には、繰り返すが、矛盾はない。だとすれば、餓死してゆく身体が、資本主義のそれとは別の迂路を経て、この大量のモノと出会う事態を想定すべきだろう。それが「奪回」という不自然または反—自然の行為であり、黒田喜夫に固有の意味での「疎外の克服」である。固有というのは、餓えた身体が——資本主義が配備するそれとは別の仕方、市場とは別の場所——モノと出会うことは、国家権力からすれば「不自然」であるのに対し——この出会いを国家は「強奪」「掠奪」「犯罪」「暴力」等と呼ぶだろう——、国家と資本が連携して強化・固定させる「労働力の商品化」の自明性の方がむしろ「不自然」であることを、この出会いははつきりさせるからである。すなわち、不自然または反自然においてこそ、「自然」が回復される（疎外の奇妙な克服！）からである。この不自然ないし反自然の行為が、人為的に生産した「自然」を維持しようとする暴力（法を指し維持する暴力）に对峙する、今日では完全に換骨奪胎されてしまったベンヤミンの言葉をそれでも用いて言えは、「神の暴力」である。

ここで神は倒錯しており、その倒錯において、自然の／＼という不自然を、解体する。この餓えた身体とモノとの反資本主義的かつ肯定的な接続を、ドゥルーズ／ガタリの語用を借りて、私は「離接的综合」と呼ぶ。離接的综合とは、後述するように、氾濫するモノ／飢餓という対立する両項

またはそのいずれかを肯定ないし否定するのではなく、それらの間の差異—距離—それ自体を肯定するという倒錯において両項を否認し、別の展望を提起する手順である。鶴飼哲も黒田喜夫が、例えば『詩と反詩』という題辭に示されるように、「〔…〕接統詞」とによって、二つの項を、分離したまま結合している」と指摘する³。しかし、同論はこの「と」の思考を「特異な否定の弁証法」と規定した上で、黒田喜夫は「深刻な人間主義」に留まっていたという。飢餓はあくまで人間にとつての飢餓である他ないと黒田喜夫が考えていたからである。すなわち、黒田喜夫は「動物」を飢餓から排除しているというのである。ここ一〇年程フランスを中心にヨーロッパで為されてきた動物と人間の境界をめぐる議論の流れに即せば、この読解は正しいのかもしれない。しかしここで私は、私なりの現状（二〇〇八年秋以降）への感覚から、むしろ飢餓という現象の人為性（不自然）に身を以って触発された黒田喜夫を強調したい。尤もこの強調点の相違は、たんに状況の変化や状況に対する感覚の相違には還元されず、そもそも黒田喜夫の思考を「特異な否定の弁証法」（その内実が私にはわからなかった）と捉えるのか、それとも対立項の何れにも与さぬ、二項間の差異—隔たりの肯定と捉えるのか、という点に及ぶかもしれない。

ともあれ以下、黒田喜夫におけるこの離接的综合または反—自然の思考の作動様態を、「自然死」「共同幻想」「党」といった項目を立てて、見てゆきたい。

自（然）死と共同幻想

黒田喜夫にあって離接的综合は、例えば蜂起や街頭行進といった形態において（のみ）、思考されているわけではない。それはむしろ、個々の人びとの餓死や自（然）死において、出現する。自（然）死とは何か？ 人為としての自然—倒錯を潜り抜けた先に出現する再倒錯—反自然としての「自然死」である。『自然と行為』に収録された佐々木幹郎との対話で、黒田喜夫はみずからの革命像を、「自然」の観念と絡めて、表明して

いる。

「…」ぼくなどは人間にとつての解放は「自然死」（この自然死は病氣や老衰でフトンの中で死ぬこととられると困りますが）が究極なんであつて、その先はそれ以前の鏡というか、ひっくり返つたものでしかないという考えが牢固としてあるもんですから……。「…」革命というものだったら人間の「自然死」のそこでいいんじゃないか、そうしてたとえば安藤昌益がかつて考えたような「直耕」といった、自然と労働とエロスがあつてそれ以外の「法世」はいっさい虚妄だという、それに対応するような解放の実在の像を革命は目指すんで、それでいいんだ、それ以上の価値あるものは生きるものとしての人間にとつてないんじゃないかという……。

この「自然」は、いわゆる自然にほとんど敵対する「自然」、先に述べた不自然な「自然」を再倒錯させたその限りに出現するような「自然」であり「自然死」である。自然に死ぬ……それは一体どんな事態なのだろう。身体に介入する医療制度や生／死の境界線を定める法制度、その他無数の線の複雑な錯綜からなる人間的「死」を逸脱したところに出現する死、おそらくは動物的でさえないだろう死……それは自死にも近い何かとして、「自然」を措定し且つ維持する法秩序の眼差しには映るかもしれない。ここで黒田喜夫が提示したヴィジョンには、死をめぐる彼の思考が凝集された簡潔さにおいて現れている。ここにいたる過程で黒田喜夫が思考し続けた問いは、吉本隆明が『共同幻想論』（一九六八）で論じた問い、個体の死を国家や宗教、または法秩序といった形態において吸い上げ、みずからの糧としつつ作動する「共同幻想」——それはいわゆる主権的権力の母胎、少なくとも構成要素の一つと見做されている——をどう捉えるのか、という問いに踵を接している。このモチーフは、やはり吉本の『言語にとつて美とはなにか』（一九六五）を論じた一連の論考（『言語にとつて美とはなにか』批判をめぐって）、「言語にとつて美とはなにか」緒論」などを収めた『詩と反詩』（一九六八）や『彼

岸と主体』（一九七二）から、すでに黒田喜夫の思考に一貫している。黒田喜夫は吉本隆明の思考をほぼつねに起点として、思考した。それは当時、吉本の仕事一つ一つが、黒田喜夫に限らず、変革を志向する人びとの一部の間に深く膾炙する問題提起を行うものであつたからと思われる。黒田喜夫もまた、みずからの思考を鍛錬するための叩き台として、吉本が投げかける状況への問いを受けとめ、咀嚼し、そして解体しようとして、苦闘した。『彼岸と主体』における黒田喜夫の思考の強靱は、『共同幻想論』を徹底して内在的に読むことによつて、その基底自体を踏み抜いてゆく点にある。問題圏を吉本と等しくしながら、それをさらに大きく深い視野に向けて解体し、また解放する作業——そう言つてもよい。そこで、この特異な「自然死」を考える手がかりとして、『彼岸と主体』に抛つてみたい。

占領——帝國と資本

高等小学校卒業後、上京して品川の工場で働いていた黒田喜夫は、戦後、日本共産党に入党し（一九六一年頃除名される）、少年期を過ごした山形県寒河江市で農民運動に従事する（出生は同県米沢市）。肺を患つた彼は、療養と並行しながら詩と評論を書き続ける（関根弘らと労働者のための同人詩誌『列島』を創刊）。生涯に渡つて、農村と都市の狭間、近代と資本制近代の狭間で翻弄されながら生き、死んでいった者たちに眼差しを注ぎ続けた彼は一九八四年、東京で亡くなる。大場義宏が『食んにやぐなれば、ホイドすれば宜いんだから！』考——わが黒田喜夫論ノート』で繰り返し指摘する通り、一九六〇年代から七〇年代にかけて、この国の村落共同体の解体がなし崩しに進んでゆく状況の中、吉本隆明の『共同幻想論』への応答という体裁の下、『彼岸と主体』はこの国の言説空間に出現した。同書は冒頭に四つの長編詩を掲げ、「負の解放」および「村と幻」と題された考察を交互に計一二配した「彼岸と主体一」、「友への手紙」と「あとがき」から成る「彼岸と主体二」の三部構成となつている。そこで黒田喜夫は吉本の「共同幻想」概念を、その深みと

射程を測るようにして、或る試練に晒す。それは親族二人の自死である。

近年、親族の中に二人もの自死者をみた。その同じ時の区切りの間に、いわば心身ともに死に接し、死との必死な（とは、おかしな云い方だが）不様な闘いにのたうっていた私などからは、叩き殺されようとも死にそうもないと見え、年長の生活者の自死は、ひどく衝撃の深いできごとだったが、その病弱者でも心乱れ易い若者でもない、われわれの時代の数十年を生き老境に入った生活者、村落民の処決にふれて、云いようもなく心うたれたのは、二人の死の様相における或るすがた、つきつけられれば、私なども死にかかわる夢魔のようにして、なおどこか深いところで囚われるというほかはない死に様のひとつのすがたからだった。二人の死者は、叔母と、別な叔母の連れ合いであり血縁である老人で、私の育った村と河をへだてた河上と河下の聚落に住んでいたが、その辺りに生れ育った者の内に、交わるような自然と観念の倒錯を想わせて或る心的な領土をもつらぬき流れるといえるほどの河（…）にまつわって、一人は河上から流れの或る箇所⁽⁵⁾に身を投げ、もう一人は河下の家から河に沿って溯り、ほとんど同じ箇所⁽⁶⁾の岸に死んだのである。その辺りのひとびとのいう「河ながれ」をしたのだ。

ここで黒田喜夫は老いた親族二人の「自死」の背景に、「自然」と「観念の倒錯」との「交わる」ところに存立する、「或る心的な領土」を見てとる。この半ば自然、半ば観念から成る「倒錯」において像を結ぶ「村」または「河」に二人は呑み込まれた、否むしろ、みずから呑み込まれていったようだ。人を呑み込む、みずからをして呑み込ませるこの「心的な領土」は、どのように構成されたのか。「領土」と呼ばれている以上、そこは何か⁽⁷⁾に占領されている。それははつきりしている。この「領土」は、「日本資本制の重層する構造の底なる村」、すなわち天皇制と資本制とによる二重支配の構造として、その連続性を断たれることなく、戦後も依然、存立し続けてきた。そしてこのように存続すること自体によって、この村落は緩やかに、だが確実に崩れ落ちていった。まるでこ

の崩落の軌跡をなぞるかのように、二人の人間が河に落ち、流れに晒され、身体の有機的組成を緩やかに崩壊させてゆきながら、河という「自然」の中へと、不自然または反自然的な仕方⁽⁸⁾で、すなわち自死において、戻ってゆく。これが自死と自然死の交点に出現する、「自（然）死」とでも綴るべき、不思議な死の様相である。ここで敢えて問う。二人はこの死において、二重の支配から逃れえたのか、隷従したままなのか。それとも天皇制と資本制、そのいずれかに従い、いずれかに背いたのか。「…」死せる戦後革命のうし絵たる農地改革後二十余年にして強烈に実現された国家独占体、資本直達による村落解体（…）を経てきたこの「村」の只中へと、彼らは、「…」或る水準の消えようとして消えない自然と観念の顛倒の渦に文字通り逆さになって身を投げ（…）、（…）そして彼らがそれに身を投げた時、そのいわば背景をなす空に、最高の高みまでのぼった共同的な幻想であるとされる（宗教・法・国家とのぼるとされる、ならば——）〈国家〉の虹か逆光かがくつきりとかかっているであろう（…）と黒田喜夫は言う。だとすれば、この死は資本制に背を向けた天皇（制）への献身であり、且つ天皇（制）に抗する投身である。この死は愚かだろうか。或る意味ではそうである。この「心的領土」が現実の政治権力から「解放」されているならば。だが、そこは占領され、解体されている。吉本にあっては整然と分割され対立していた共同幻想／個的幻想の区分が、ここでは、この村落では、瓦解している。だからこそ老いた二人は、みずからを心的に生み、占領したあの河—自然に身を投げ、みずからの身体を構成する諸要素を分解させつつ、選っていったのである。それは権力への反攻—否定としての権力への挺身—肯定、反自然としての自（然）死である。この死は二重権力の分身、すなわち「逆光」の虹である。

この村を構成する「自然」は半ば人為（権力）的である。「自然と労働との永く変らない苛烈な交わりがそこにあり、自然はそのまま価値觀念・所有によって擬態となった自然であったが、それ故に、その接点によって持続される成員たちの幻想に顛倒した（自然）、そこでの人と自然の

直接的な擬制たる全關係を包む、疎外された（結合）が、ひとびとの營為にまつわり、逃れがたいようにそこにあつたのだ⁽⁹⁾。だから、繰り返すが、この心的領土を『共同幻想論』による心的領域の三分（自己幻想—対幻想—共同幻想）で捉えることはできない。「自由」が最大限に延び広がる「自己幻想」の領域を根拠地として担保した上で、ここを拠点に言語芸術その他の表現行為の「自立」を云々することは、この村ではできない。むしろ「自己幻想」の領域は、つねにすでに「共同幻想」に侵食されていることにおいて、かろうじて存立する。フロイトは無意識を未発見の大陸に喩えた。そして大陸はつねに植民者の視線において「発見」（捏造）される。「自己幻想」は、それが無意識に属す限りで、母語と帝國言語、二つの言語によって構造化されている。「母（語）」とは帝國の書記の文字表記において出現する「擬態となつた自然」である。「自然」とは植民地の別名であり、占領下においてはじめて、自己または個的幻想を云々することが可能となる。それだけではない。心的領土は根底から文盲たる資本制にも蹂躪されている。文盲とは、資本制において介して、市場において商品化—流通可能となるという意味である。「村」に留まり続けることを赦されず、都市へ流れ着き、自らの労働力を商品化して生きる農民たち（厳密には農民でさえない人びと）に、黒田喜夫は生涯、触発され続けた。黒田喜夫自身の生がそのような流離の過程であり、「……」街で寡婦になつてい「た彼の母が、「……」街にとどまると悪化し、村に帰ると軽快する奇妙な神経症状を病んでいて、何回も或る地方都市と村を往復したあげくに、遂に生家のある閉塞の村に戻つたことも、私たちは知っている。帝國と資本によつて「日本資本制の重層する構造の底なる村」は、心的現象としての「村」とともに二重に支配され、領土化されている。この支配は、奇妙な「やさしさ」すら湛えて、占領を継続する。

「……」わが底なる民には、そこで最も深く共生的・内部結合的に（村）にかか

わつて現存性を生きたときに、寄生地的土地所有に基くその近代の諸關係が、族長的・血縁的支配と隷従依存關係として反逆し得ざるものとなり現れたということだが、そこで日本資本制は、そのような（村）を（村）たらしめる（禁制）を資本の障害とせず成立互件として、苛烈で独特な分解・収奪をあらしめ、そして上なる大日本帝國は、そのような（村）をなすところの幻想体を上へ上へと汲みあげ、国家幻想の内質を統合しつつ、それをまた国家意志の絶対的な降路になりたせたと見えるのだ。

しかも、そういうなりたちと一体に、ひとびとには、なお（村）は、苛烈な収奪と支配される苦悩、汚辱をこうむりつつ、その飢えを遠くはるかな時から続く自然のように受けて（生）と（土地）の結合するやさしさの幻に顛倒させ、共生と結合の幻の下から、その彼方の、時間を越えた共生と結合の境域の幻へと生きる現存のところでもあつたことは、父祖たちからの不可能だつた地上の生（死）の集積において、そこでやみがたかつたのである。

負の解放

絶え間ない上昇と下降の循環運動を通して「村」を捕獲するこの「幻想」という名の権力の回路において、もはや何が個的「自己幻想」であり、「共同幻想」であるのかはわからなくなり、また問題ではなくなる。したがって、例えば、三木卓はその『彼岸と主体』への書評において、「しかし、われわれが共同幻想から解放される、ということはきわめて困難なことだとわたしは思う」と疑義を表明しているが、むしろ黒田喜夫の意図は、個的幻想／共同幻想という区分自体を、それらの概念の酷使を通して、解体する点にある。とは言え三木氏は同書評を、「……」支配権力・制度に対する解放闘争の形成」という具体的な政治行為がのべられるとわからなくなってしまう。（第一、われわれが問題とする共同幻想は支配権力のものだけではないだろう）そのような行為のなかで契機をつかむものもあるだろう。しかし、それはこの場合、他の行為と同じ次元にあるものだと思うが、どうだろうか（傍点引用者）と締め括っている。この視点は、後述するが、表現が革命に向かう契機を「内面」を規定・

限定する「外部」に求める視座から距離を取っており、意に反して、黒田喜夫のアクチュアリティを、消極的・否定的にはあるが、示している。問われているのは、「負性化された自己解放の覚えざるたたい」〔彼岸と主体〕、p. 66、傍点引用者〕だからである。

個的であれ、共同であれ、そもそも言語を与えられたというそのこと自体が、すでにして或る非人称の人間的な（権）力に捕獲されていることを意味する。だとすれば、あの反自然としての「自（然）死」が、（不）自然としての人間であることの脱臼を促すような言語それ自体（へ）の変形作業を伴いつつ、その回路からの脱出となる。「苦悶から、その彼の他界感に死にゆくことは何と離脱であつたらう。だが、それは何という恐怖であつたらう。私は恐怖そのものかたまりとなり、死に脱けてゆけない自らを呪いながら、死に面した者の最後の逆攻として、そのとき、死にゆく者が自らの死をみつめ記録する」というような自己意識の果ての行為をきれぎれに思っていたものだ¹⁵。ここで言語は、それ自体を目的化された「自立」とは逆方向に、この「自（然）死」を記録する——すなわち模写（再擬態）することにおいて再倒錯させる方法と化し、そこに反自然（死）を、幻視しようとする。擬態された自然である限りでの死を再倒錯させることにおいて浮上する「負性¹⁶」としての死を、であり、それが人間的（権）力からの解放——神の暴力——である。「死にゆく者が自らの死を見つめ」るこの眼差しは、「（…）個的な死が絶望的に閉め出されたまま、ただ共同幻想に開かれ奪われることの構造¹⁶」（…）に、『共同幻想論』が見ようとし¹⁷ない、個と共同との間に開かれる「（…）私たちの感ずる或る狭間¹⁷」（…）を見つめる。この「狭間」には、「（…）まるで知らざるもののようにそこにくみとり得ていない人の世界の暗部¹⁸」があり、「（…）それは「（…）わが底なる民の共同幻想の内¹⁸で解き放たれようとして放たれず、それにより囚われるとみえる転換において負性¹⁸としてだけ現出する、逆転した人の自己解放と言え¹⁸るものの姿ではないかと思えるのだ。まさに、そこにわが「河ながれ」の死者のありようも¹⁸含めた、当初からの問題のなりたちがあつたと私には思えるのである¹⁸」。

かくして二人は自（然）死において、「逆転した自己解放」を実現する。そして、この解放を記録するとき、黒田喜夫自身が死んでいる。ここで言語とは死の鏡である。人は言語において他の人びとと、死を分有または共食い partage する。言語が浮上させるすがた、言葉が見せる或る死の光景。それはすでに死んだ自己（から）の倒錯的解放の光景である。「（…）そのいわば背景をなす空に、最高の高みまでのぼった共同的な幻想である¹⁹とされる」（…）〔国家〕の虹か逆光かがくつきりと」光り輝いている。権力に曝され干渉され、微粒子状に弾け飛ぶ身体が、その権力との衝突において、煌めく死を現出させる。これが黒田喜夫の言う「彼岸」であり「主体〔化〕」である。人間の（権）力を負性²⁰において光り輝かせるために、（権）力の高みに上昇すると同時に下降するこの狂気を孕んだ再倒錯する自（然）死の運動において、個的²⁰死は共同幻想へと揚棄されない。むしろ、この死は両者の「狭間」を、負性²⁰として浮上させる。「それは（異常）としての個体の幻想の飛躍か離脱が、そのまま共同幻想に呑まれる様相といえるが、そのように生きるものの覚えざる投企の内からそれを逆²⁰にみるなら、実はそこには、「共同幻想」といわれるものの逆顕現化、それへの没入の行為において、負性化された自己解放の覚えざるたか²⁰いが、現存在的につらぬかれるさまが必ず現れているといえるのである²⁰」。見られる通り、黒田喜夫の文体においては、（権）力とそれへの反攻が、肯定と否定が、主体（主語）と客体（対象または目的語）が、互いを交換し、模倣し合う。これが「負の解放」である。親族二人の自死を思考する黒田喜夫自身、「その同じ時の区切りの間に、いわば心身ともに死に接し、死との必死な（とは、おかしな云い方だが）不様な闘いにのたう²¹つてい」たがゆえに可能となる、幻想としての言語を解体する過程である。擬態において倒錯した自然としての共同幻想への投身による権力の肯定という再倒錯は、ここでは権力への隷属でなく、その否定——ドゥルーズ／フロイト的に言い換えれば否認——である。これは個的死と共同幻想を媒介し融合させる弁証法ではない。死を共同幻想に回収する——「A（個の死）はじつはB（共同幻想）である」——のではなく、融

合するかに見える個と共同の間隙で両項を並走させる「狭間」——「A（個の死）がある、そして／＼と、B（共同幻想）がある」——、非—関係に引き裂かれることである。吉本が共同幻想を個的幻想と同置するのに対し、逆に黒田喜夫は、個の死と共同幻想とを、或る同じ死の、並走する二つの様態とする。黒田喜夫と、その二人の親族とは、他方は国家権力を光り輝かせる逆光の虹を描きだす倒錯的な上昇—下降運動の描き出す軌跡において、そして一方はその倒錯的運動の「自己の死の記録」を通して模写（再擬態）において、或る同じ死を、互いに非—関係のまま、離接綜合的に死に且つ生きる。これが黒田喜夫の抉出する肯定と否定の相互反転的（抗抵⇓定肯）の（悪）循環、「自己意識の果て」に現れる、人間の「逆転した自己解放」の思考である。「精神とは身体の観念である」という並行論が想起される。一人の自死に触発された黒田喜夫の身体は、この触発を以って、一つの精神の観念をつくりだし、そこにおける自己の死の観念が、二人の自死した身体と並走する。ここで黒田喜夫とその親族たちとの間に、互いに何の関係もない双方各々を肯定しつつ並走させる、一つの回路が動作配列される。自（然）死または自（己）死の記録は、餓死する身体の肯定であり、この肯定において／＼を、餓死の身体は生きる。この非—関係において観念（言葉）は、身体が崩壊に曝されるのと並行して、後述する通り、統辞法を揺るがせる。

並行する複数の死

（言語）芸術を国家権力その他の共同幻想と呼ばれる作用域から切り離し、この切離自体を以って個的幻想における言語の自立を権利請求として掲げる思考とは逆に、黒田喜夫は、言語そのものにすでに帝國が浸入し、資本が常駐していることを踏まえ、言語それ自体の変形を通して、二人の親族の自死と自己の死とを離接的に綜合させ、並走—重複的に生きようとする。死を与える共同幻想から、言語を通した死の分有への推移は、共同幻想から疎隔された避難域として言語を捉えるのではなく、共同幻想、国家、言語の複合の中に潜り込み、そこに曝されながら、或

る生（から）の逃亡を、自（然）死を肯定する。それは共同幻想の内部から人間の（権）力を光り輝かせる＝爆破させる、（再）倒錯的肯定—否認の思考である。

黒田喜夫にとり憑いていた「共同幻想」として、歴史現実的にはスターリン独裁として出現した（党）の形象がある。変革を夢見る個々の「幻想」はまたしても、振れたかたちで「共同幻想」に同置され、変質したようだ。だがここでも個と共同幻想の「狭間」を、黒田喜夫は見つめている。「ある革命の死者への手紙——ハンガリア動乱十周年に」は、「十年前に」「（…）先祖累代のちびた墓の前に佇ち、それから墓場のいっばんの木に吊下がって」死んだ「同志S」に宛てて綴られた、忘れ難い書簡である。きみの意志的な縊死には、「（…）民衆への恥と淋しさ」があったのかと、黒田喜夫は死者に問いかける。Sは或る党の一分派の方針に従って、武装闘争に参加しようである。ところが党はこの「逸脱」を、「（…）誤った方針にはいつでもそれを代償する誤った分子の罪と外因がある」としか捉えず、このような「逸脱」の持つ意味をその内側から問うことなく、ひいてはみずからの存在そのものを問いなおすこともなかった。

Sが党を裏切ったのは、それが民衆のための革命的行為の一環であると判断したからだろう。ところがこの「逸脱」行為に皮相な見解を示すことによつて党はSを、そして民衆を、ひいてはみずからをも、裏切ったのである。Sは引き裂かれる。民衆の側に立てるなら、彼は引き裂かれなかっただろう。だがSをして武装蜂起を決断させる状況に民衆はいた。その限りで民衆は敵であり、「（…）きみの苦いたたかいの相手でもあった「（…）」」。Sは引き裂かれる。Sは民衆のために党を裏切り、その党がSと民衆を裏切り、ところがその民衆はSの敵だった、そもそも、だからSは武装蜂起したのに……袋小路が現れる。友／敵、党／民衆から成る行列をSは順列転換させられる。党と民衆、いずれもSにとつて敵であり且つ友だからである。この行き詰まりの結び目を断ち切るようにしてSは死んだ。ソヴィエト連邦の統制に抗して決起したハンガリー

動乱（一九五六）で、ハンガリーの労働者に殺された赤軍兵士やスターリン主義者たちと、それとは別の場所で、しかし彼らに並走するようにして自死した、或る村落を出自とする青年活動家とは、共に、或る裂目に直面していたのではないか。一〇年後、死者に語りかけながら、黒田喜夫はそう問う。

だが民衆の底には、きみを眠らせないもうひとつの民衆の姿があり、だから、それに追われるきみとブダペストの死者までを内に抱いて、私たちは、目に見える革命の党の悲劇的な体質にもかかわらず、権力と現実の状況の全否定とは、現存の支配権力の（私たちには現存の資本制支配権力の）事実上の許容とひき換えにしかなし得ないことだという、革命と権力の鋭く深い裂目に入ってゆくほかはないのである。未成の党はそのおくにある。⁽²⁵⁾

ハンガリーの労働者に殺されたスターリン主義者と全く無関係に、しかし並行的に、Sは「革命と権力の鋭く深い裂目」に己を吊り下げた。この死は一つの「真理」を露出させる。そして黒田喜夫はその「裂目」を、Sと並行するように、己も抱え込もうとする。「それは、つまりは裂目なのだ。きみが吊下がったところの真実は、革命の党の悲劇的な体質にもかかわらず、権力と組織の絶対否定とは、私たちには現存の支配権力の事実上の許容ということとひき換えにでなければ持ち得ないというきみの裂目だった。きみはみずからブダペスト街頭のスターリン主義者のように吊下げることによって、その裂目をみつめてくぐろうとしたが、私（たち）は、そのようなきみの死を逃れられず内に抱えこむことでそれをくぐろうとするのである」⁽²⁶⁾。黒田喜夫は、この並行する複数の死に、意味を与えようとしているのではない。繰り返すが、それらはただ並行しているだけであり、相互に何の関係も持たない。なぜか。「……」死者ほど死んでいる者はいない「……」からである。その死に立ち会った生者はみずからもまた、ただ彼（女）らと並行的に、無関係に、死んでゆく。それらは「ただの死」、先に引いた黒田喜夫が言う意味での「自然死」で

ある。そして無関係であるにもかかわらず、あるいはそれゆえにこそ、それらの死を、黒田喜夫は抱きしめ、みずからも「裂目」に引き裂かれ、あの袋小路に入ってゆく。と言うのも、「赤軍兵士に撃たれて死ぬハンガリア労働者の死も、蜂起した民衆に撃たれて死ぬ赤軍兵士の死も、ただの死だ」と言い切った直後、黒田喜夫は或る排他的選言を仕掛け、離接的綜合を配備するからである。以下に引く二つの節は、無関係の関係において、並列する。

「……」そこにはまず、逆転させられた民衆の希望の、判断停止の哄笑の、矛盾そのものをそっくり静止して体現する双方の死者の、その姿のままが描く革命権力の許しがたい擬制が現出していたが、きみがみずからブダペスト街頭に吊下げられた男と化してその静止図に近づくときに、静止を破ってきみを革命に蘇生させるのは、死せる革命を固守することが民衆の逆転した希望を逆に希望の敵に売り渡してしまうことなのを知らないものの壁に、垂直に抗した瞬間に倒れて、革命と権力の裂目を自分の死で指し示したブダペストの死者たちの動態だったのである。

そして、むしろ心死者に動態などはないのだ。事實は、きみの死を内部に抱え、きみの死を通じて私たちがブダペストの死者たちをも自分たちのなかに抱えるときに、私たちのなかに、革命と権力との鋭く深い裂目を通して革命のなかの革命に無限に近づいてゆく動態、疎外とたたかうながい道に生まれる疎外とたたかう長い道への思想動態が生まれるのである。⁽²⁷⁾

ブダペストの死者とSとの、この無関係の関係すなわち離接を、黒田喜夫はみずからの中において並列または綜合させる。繰り返す。精神は身体の觀念である。Sの死そしてブダペスト街頭の無数の死に触発された黒田喜夫の身体は、この触発を以って一つの精神の觀念をつくりだし、そこで複数の死が並走する。黒田喜夫と死者たちの間に、「河ながれ」の死者たちと同様、互いに無関係なまま各々を肯定し並走させる一つの回路が動作配列される。この（非）関係において、言葉は身体崩壊（こ

ここでは縊死」と並行し、統辞法を揺るがせる。死者たちが革命と権力の裂目を動態的に描き出したと述べた直後の、死者に動態などないという急転。そこで黒田喜夫の身体は、この排他的選言を一身に引き受け、引き裂かれ、そしてこの身体が、死者の動態をではなく、「思想動態」（身体の觀念）を構成する。死者に動態はない。死者を触発し、身体の觀念を発生させない限り。

「未成の党」

そしてこの「思想動態」は、「……」革命のなかの革命に無限に近づいてゆく。或いは個と共同幻想の「狭間」、「革命と権力の鋭く深い裂目の「おくにあ」る「未成の党」に、近づいてゆく。それは死者たちの「党」である。そこでは「河ながれ」した二人の親族やSの死が、それを記録（反映）する黒田喜夫の言葉の鏡を通して乱反射する。無論それは、それもまた一つの共同幻想にすぎない。だがこの幻の党は「現存の支配権力」に回収されない。この党の成員は、自然という不自然を再転倒させたとき現れる、自（然）死たちの群れである。共同幻想が「現存の支配権力」として実現される場合は、たしかにある。しかしすでに見たように、だからと言って、このことは、表現行為としての個的幻想と、権力装置としての共同幻想という分割を、受けつけるものではない。黒田喜夫は「階級」のカテゴリを生涯手離すことはなかった。それは詩を政治に「素朴」に接続させるということではない。むしろ黒田喜夫は、そうした詩作を厳しく批判する。言語表現の自立を説く者ならば侮蔑し嘲笑するかもしれないそれら「素朴な」表現を、切り捨てるのでなく批判すること、なぜそのような事態が発生してくるのか、その根源を見つめようとする。そこでこそ、革命に向かう表現は開かれうる。黒田喜夫はその根源を、表現への欲求に駆られた一個人を例に、次のように描き出す。

「……」或る具体的な寄るべき階級の一人にとつては、例えば革命が深化して

もしなくても、彼が変動の一波にゆられたときから、政治意識とも想像的な表現への意識とも分けがたい言葉への欲求が生まれることがある。……」彼が言葉を得るためには、その前になさねばならないことがあるのだが、しかも実際には、その行為と言葉への欲求はかさなっておきてくるのだ。彼が言葉を意識的に分立させるにはより深く行為のなかに入ってゆかざるを得ず、実在の革命と未だならざる革命の矛盾の結節点まで、自己を対象化しつつ、行ってみなければならぬのだ。「……」つまり彼は、みずからの負荷として、罪のように矛盾を負うことなくしては、言葉を得る矛盾の結節点まで行くことができないのだ。かつての私の場合も、あなた達（労働者出身のインテリゲンチヤ）や「社会の底の方から言葉を求めて這いあがってきた、少なくとも這いあがるうとしてい、おそらくは数多くはない人たち」——引用者」の場合も、そのように、變動に直接参加するコースにひきいられたのは、実在する革命の組織、日本のスターリニズム党しかなかったのは認めなければならない。⁽³¹⁾

ここでも彼は引き裂かれている。「言葉」を得るには「行為」が先立たねばならないのに、そしてならないから、彼は行為の中により深く入ってゆかざるをえない。この逆接と順接の並走において、政治／文学や個的幻想／共同幻想といった分割はない。彼はただ「実在の革命と未だならざる革命の矛盾」に引き裂かれている。そして、革命とはこの引き裂かれの解消ではない。革命は「未だならざる」ものであり、党は「未成」である。革命も党もはつきりした綱領として予め描かれておらず、むしろこれから出現する。未だ実現されざる革命そして党に達するという矛盾または倒錯に引き裂かれぬ限り、彼には「言葉を得る」ことができない。言葉は行為に並走して立ち上がる。この矛盾（倒錯）がこの国の政治に固有の事情なのかどうかは措く。ただ、それが黒田喜夫にとつての歴史・状況把握であったことはたしかである。そして彼に「政治意識とも想像的な表現への意識とも分けがたい言葉への欲求」を齎すものは、「……」実在する革命の組織、日本のスターリニズム党しかなかった「……」。ということは、現在でも或る寄るべき階級の一人にとつては、彼を

行為と言葉の原初にひきいれるものが現存の組織、党でしかない場合がさげがたくあり、彼に開かれている路が、ほとんど、スタートリニヅムを通じて、スタートリニヅム批判の可能性に至るものしかないのを証しているということだ³²。「河ながれ」の二人の死者やSと同様、ここでも権力への反攻は、再倒錯において遂行される。この内在的批判から遊離したところで表現の自立を云々する言説は、的を外している。個的であれ共同的であれ、政治的であれ芸術的であれ、彼が言葉を欲求するのは、それが未成の党そして革命からの、指令―呼びかけだからである。

表現が革命に向かう契機を、黒田喜夫は詩を綴る主体の「内面」を規定・限定する「外部」（飢餓）に求めていたかに見える。この場合、生活水準の上昇（高度経済成長や大衆消費社会の出現）に伴い、「詩と革命」なる問題機制は消去されてゆくが、にもかかわらず「内面」と「外部」の関係は依然として存続し、詩は「革命」とは別の仕方で「外部」（消費社会？）を表現（精確には現状肯定）し続けながら、延命することになる。だがもし「外部」と「内面」とが、消費社会に飢餓が出現するようになり、非―関係的だとすればどうだろう？そして、詩を書くといういとなみが、むしろ「外」から不断に訪れる（指令）による、原理的に終わらなき行為だとすればどうか？ 桂秀実は、このような視角から、黒田喜夫が援用した「マレビト」（「永遠の青年」Ⅱ「あんにや」）概念を、さらにはその終わらなき詩作（「不可能な詩の可能性」）をも、論じている³³。この議論に示唆を受け、私は、この外から「おとづれ」る「マレビト」とは「党」なのでは？と考えた。ところで折口信夫の規定では、「マレビト」は共同体の被差別者にして超越的存在、「秩序侵犯的」かつ「秩序形成的」である。同論考で桂氏は、黒田喜夫の「マレビト」にはこの両個性が欠落しており、「黒田のコミュニケーション論は、論理としては、マレビトが超越の二者となってしまう契機を摘み取ることができない」と批判している。「…」黒田にあつては、マレビトが共同体に永久に異議申し立てをする存在でなければならぬとされる（「…」からである。だが「マレビト」が「党」だとすれば、「…」共同体に永久に異議申し立てをする

「…」この運動が、超越の二者としての敵を産出し、ときにその敵自体と化しもすると考えることができる。抗争は、抗争を担う敵対し合う二者に先立つ。革命は、さらにはその敵すら、この「永久（の）」異議申し立て³⁴から出てくる。この意味で黒田喜夫の「マレビト」は両価的と言える。だからこそ黒田喜夫において革命と表現、「行為と言葉」は、並走する非関係に措かれているのであり、また党も革命も「未成」なのである。言い換えれば、ここで言葉と行為は互いに対して過剰であり、その関係は未だ安定していない。行為と言葉の過不足なき一致（十全な意味作用）は、そこでは未だ成立していない。その一致を賭けた抗争には、詩と同様、原理的に終わりは無いが、多くの場合、暫定的・妥協形成的に停止し、そしてときに全体主義的権力に化体する。だから「…」黒田が夢見た反天皇制的なコミュニケーションが、ほとんど具体性を持ちえない「…」という桂氏の指摘は、この「コミュニケーション」を未来に実現されるべき堅固で安定した状態と捉えるならば、正しい。しかし、黒田喜夫にとつてのコミュニケーションとは、「…」永久に異議申し立てをする「…」過程それ自体であり、「書く」という終わらなきいとなみ同様、安定した意味に揺さぶりをかけ、掻き乱し、そして己を引き裂き続ける行為そのものであると私には思われる。ここで表現と権力の関係に問題は移行する。桂氏は黒田喜夫の「マレビト」における両個性の欠落を論拠に、「秩序侵犯的なマレビトは秩序形成的なマレビトと通底することなしには、「国文学の発生」を担うことができないのだ。表現Ⅱコミュニケーションは秩序³⁵の成立を前提としているからだ」と述べ、黒田喜夫による短歌批判を無効とする。短歌を三十一文字（シニフィアンの秩序―序列）の中に過剰な情念（シニフィエ）を回収する美（学）的装置と捉えれば、秩序とその侵犯との通底ゆえに、過剰な情念は秩序に吸収され、情念と秩序は同時に安定化する³⁴。しかし、黒田喜夫のコミュニケーションを構想しうるとすれば、それは意味の安定ではなく、その動揺にある。情念の過剰を文字の序列に回収させて安堵を得ることではなく、この序列を、永久に、掻き塗り、逆撫でし、猛り狂わせ続けることにある。むしろ冷戦期には、共産主義的運動

がその意味を安定させている時期もあった。いずれにせよ問題は意味の確定をめぐる、ニーチェ的な解釈の抗争である³⁵。かくして、スターリニズムを肯定することにおいて否認する、黒田喜夫の倒錯的並行論は、ここでもたしかに作動している³⁶。

飢餓の観念

黒田喜夫は、この行為と言葉との引き裂かれをより原理的に思考し、表現論として展開した。「死は餓えた子供に何ができるか——サルトルらの発言に」は、「文学は餓えた子供のために、二十億の餓えたひとびとのためにかかれねばならない」というサルトルの言葉を起点に書かれた。「言語の（芸術的）自立」を説く立場からすれば典型的なまでに「政治と文学」の構図に縛られたサルトルの言葉を受けて、黒田喜夫は、「実は、人間には、飢えがただ餓えであることなどはあり得ないのだ」として、精神と身体という区分に亀裂を走らせるように、こう述べる。「飢えとは、餓えの不安であり恐怖であり、心の飢えとなったそれは、逆に生理を支配して底なしになるのだ。〔…〕心の飢えとは、すでに状況にかかわった飢えへの一つの情動なのである。私たちにとって、飢えとは、ただ餓えであることは決してない〔…〕」。サルトル（派）もサルトル批判者も精神／身体の分割を前提——共有するのに対し、黒田喜夫において飢えとは餓えの不安であり恐怖である。精神は身体の観念である。この並行論から導出されるのは、餓えもまた一つの表現であるということだ。餓えを一つの契機として身体がみずから触発し、一つの観念（表現）をその身体に（おいて）つくりだす。精神は身体の観念である限りで「飢え」を肯定——享受する。「私が、自分自身の中の餓えた子供のために詩をかくというとき、〔…〕人間の言葉の根源的な性格により、他者の内にまた餓えた子供をひびき起こさせることで自己の内なる餓えた子供を充足しようとしていることを意味しているのであり、つまり自分の詩のアンビヴァレンツにもかかわらず言葉の共同性の根底を意識することで、その充足を果たしていることを意味しており、私たちは〈意味〉と〈叫び〉の

切り離すことのできない構造である言葉のこうなし得る性格、〈生の意義の死としての飢え〉と深くかかわる性格によって、言葉に呼びよせられるのだと考えることができる³⁷。或る身体において、〈意味〉と〈叫び〉が識別できなくなり、精神／身体という「自然な」分割が崩壊するとき、「实在の革命と未だならざる革命の矛盾」に翻弄され、飢餓において有機組織を分解してゆく身体は、「未成の党」という器官なき身体——むしろジジェク風に「身体なき器官（機関）」と言うべきか——を構成する微粒子状の細胞（！）として、私の中の餓えた子供を、他者の中の餓えた子供への共鳴作用を通して、倒錯的に享受する。

この点に関わって、菅谷規矩雄の黒田喜夫批判に言及しておく。菅谷は黒田喜夫の飢餓の思考を、主体（主語）⇨私の不在という点から批判する³⁸。菅谷は、「けれどもそこで飢えが直接語りだしたとして、それはほんとうは私の飢えであろうか。飢えにおいて私は私でありうるか。飢えを語る、ということじたい、成りたちようのないパラドクスである」と、飢えと飢えを語る「私」との間の断絶を強調したうえで、黒田喜夫の詩「空想のゲリラ」（一九五五）をとりあげる。全文引用すべきであるが、ここではその内容だけ概観しておく。村に還ろうとして彷徨う、背中に銃を背負った語り手が、自分の村の近くと思しきあたりで、「いま始源の遺恨をはらす」と銃を構えるのだが、夢でも見ているように再びなじみのない景色が広がる。やがて語り手は「無音の群落」を見つけ、道を尋ねようと銃をおろして近づいてゆくのだが、気づけば手に持っていたのは銃ならぬ棒片であった——菅谷は、この詩において「私」は最終行の「おれは手に三尺ばかりの棒片を掴んでいるにすぎぬ？」の「おれ」の一度しか現れないと指摘したうえで、この事態を、「〔…〕書くひとの〈私〉が、いわば書くことじたいに主題をえらばされ、そのあげくに作品から追放されている〔…〕と理解し、また、「空想のゲリラ」中途の「いま始源の遺恨をはらす」という一行、ここにこそ主語（主体）⇨「私」が出現すべきであるにもかかわらず現れないその事情を、「〔…〕この作品は、あらかじめ規定された時間の進行（むしろ本質的には退行だが）

に從属しており、したがって「語り手が己の村を——引用者」(目を閉じると一瞬のうちに想い出す)というその一瞬をほとんど抵抗なしに通りぬけ、夢の中に没入する(すなわち無意的な時と合体する)。この没入が無意的であればあるほど、深層に抑圧されたものに到達しやすくなるであろう。けれどもそこに存在するのは、まさしく即自性にほかならない。自然とほとんど差異をもたぬ偽・自然化された時の意識である。黒田は一気にそこまで没入した——(いま始源の遺恨をはらす)。「…」主語の消去が、この一行に決定的な空白をもたらすのである」と説明し、「くどいようだが、(始源の遺恨)は書くひとの対意識によってえらびとられた表現ではない。むしろ書くひとの非人称によつて無意的にあらわれたのである。したがってそれに対しては、一人称の意識はもろく消えさる——(おれは手に三尺ばかりの棒片を握っているにすぎぬ?)。この反問にはこたえるものがない」と断罪する。そしてさらに、「文学は餓えた子供に何ができるか」という問いにこだわる黒田喜夫に「…」どうこたえてみても、すでにこうした問いをひきうけることじたいが、クイズ番組への出演であり、慈善興行のたぐいである。ブルジョア文化のなかにしか、この問いは提出されえない」、「餓えた子ども——そらぞらしい三人称はよせ。(子供)とはおまえの子供か、それともおれの子供のことか。一人称をよこせ!」と怒号し、飢餓を語ることの欺瞞を主張する。かくして飢餓は菅谷にとつて、一人称でしか語ることを許されず、分有されてはならない。このような論を展開した菅谷規矩雄の、彼に固有の問いがどのようなものであるのか、私は未だ分っていない(「飢えと美と」および、黒田喜夫との対談、「戦後過程の『飢えと欲望』」、前掲『現代の眼』そして菅谷規矩雄、「著者への手紙『彼岸と主体』黒田喜夫著」、「現代の眼」一三二〇、一九七二年一〇月、以外に私は菅谷氏の文献を読んでいない)。ここではただ、しかし、まさしく一人称Ⅱ「私」を、黒田喜夫がその「書くひとの非人称」を通して「追放」したがゆえにこそ、「いま始源の遺恨をはらす」の一行における空白の主語——主体を担うのが私たち任意の誰であつてもよいということ、すなわち、「ブルジョ

ア」をも含めた諸々の属性の一切を捨て去つてそこに誰もが立ちうる場所を、黒田喜夫がその身を以つて切り開きまた守護してくれていた、否、今なお、その位置に到来する者を待ち受けながら守護し続けていくのだということだけを、述べておく。この「…」書くひとの非人称によつて無意的にあらわれ(始源の遺恨)を、菅谷は「…」おもしろいがけぬ客体の現出「…」と規定し、依然、主体(主語)——客体(対象/目的語)の対に囚われている。だがこの不意の到来において現出するのは主体でも客体でもない。現出するのは(遺恨を)はらす」という動詞それ自体であり、むしろこの動詞または運動こそが、主—客を事後に召喚するのである。だからこの一行は、天皇制やスターリニズムおよびそれへの反攻を、複雑な双方向または上昇—下降運動の中において思考し続けた黒田喜夫と、たしかに並走している。そしてこの運動——彷徨の過程それ自体において、帰還すべき(村)を構成するのは、今日の私たちである。かくして黒田喜夫はその詩行の中に、それを読む者たちを出来事としての動詞の中に巻き込ませる配備を、仕掛けたのである。

私——他者——子供の間で成立する動作配列において、自己を表現する身体は、反自然としての自(然)死たちの群れ、一つの(未成のわれわれ——党)を到来させる。「食べる」と「話す」が並走しつつ、身体と表現が識別不可能と化す地帯に入り込み、各々の自己享樂を通して集合的動作配列を準備する。この離接的綜合は、死を共同幻想に回収するのとは逆に、個と共同の並走または非關係において、或る同じ死が生きられる——死を(共食い)する——のと同様、私たち各々における、或る同じ「餓えた子供」の肯定Ⅱ享受において、未聞の(われわれ)を構成する。

数十年前、刑務所で餓死した祖父と、サブプライムな現在において餓死した派遣労働者が、その非——關係において、今此処に生きる私の身体で或る同じ死を生きる。誰にも知られず死んでゆく身体と圧倒的消費が並列されたこのスペクタクルな表層において、「食んにやぐなれば、ホイド(乞食)すれば宜い——それは消費的スペクタクルの只中における身体と表現の離接的綜合である。詩人とは個的幻想に閉じた自立の形象

ではない。それは物乞いである。食べることと語ることが限りなく並走する不可識別域において、この身体を微粒子状に分解しつつ、死を生き抜く乞食である。誰にも知られず看とられもせず、不自然な死を自然死に向けて爆裂的に解放させるようにして死んでゆく者たちを肯定する光り輝く無の形象である。誰にも発見されぬまま腐乱し、崩れ、自然へと反自然的に帰還する身体つまりは死体を抱きしめ触発し、そこから未曾有の「故郷」の観念を立ち上がらせること。かくして、殺されてゆく人びとの生と思考を抱きしめる黒田喜夫の異様な思考と文体は、言語をスベクタクルな表層で肥大化する流通と消費の様相において反響させるのではなく、死の過程それ自体として露出する身体的 coporeal な（われわれ）の様相において歪め、変形させる。この明るい消費の光景の中、餓死に曝された人びとが（ホイド）として誇らしく街頭に立てる日が来るのなら。消費という名の人びとを分断する資本主義の罫に陥ることなく、「民衆への恥と淋しさ」に耐える勇気を以って、己の餓えた身体を他人のびとと共有―共食いするようにして曝し合い、この一見「自然」な風景に、不自然または反―自然の亀裂を走らせることができたなら。「未成の党」そして「未だならざる革命」に呼びかけられて餓死を生きる無数の身体が個々に立ち上がり、（村）を都市の只中に幻視できたなら。モノは溢れている、そして／と、或いは、しかし／だから、労働力は（／も）売れない。だとすれば、モノと労働力を商品化するモノとが、モノに人間の仮面を被せつつそいつを仮面もろとも破壊する市場——この不自然！——とは別の場所での出会った、よい。知識人／大衆や芸術／労働の区別は失効した。前者はいずれも労働力を不安定に商品化する「賃労働者」のカテゴリーに回収され、後者はいずれも存在それ自体に「価値」の創出を強制する「生政治」に還元されたからである。状況は変わった。表現の自立を盾として政治をやり過ぎた時は去った。むしろ、政治／芸術といった分割を斥け、飢餓そして自死にすら表現行為を見る黒田喜夫の倒錯した（反自然）の思考が、圧倒的なリアリティを以って迫ってくる。だから今、私たちには黒田喜夫を読みなおす、たしかかな意志と

理由がある。⁽⁴¹⁾

註

- (1) 大野新、「おくれてきた読者」、『現代詩手帖』二〇〇二、一九七七年二月、思潮社。
- (2) 本稿は拙稿「幻想のコロニー——幼年期と国家、またはアメリカの印象」、『現代思想』三六（一一）、青土社二〇〇八、の反復である。
- (3) 鶴飼哲、「黒田喜夫の動物誌——「辺境のエロス」をめぐる」、『応答する力 来るべき言葉たち』、青土社、二〇〇三。
- (4) 黒田喜夫、『自然と行為 評論・対談集 日本近代の意識下から』、一九七七、思潮社、pp. 238-239。この言葉を端緒に据えて、黒田喜夫の思考を（村）の観点を軸に捉え、吉本隆明の『共同幻想論』とリわけその「対幻想」論と対置したうえで、（村）を田邊元一の「種の論理」と連接させつつ、この国の現在への批判さらには未来への構想をも提示した。大場義宏、『「食んやぐなれば、ホイドすれば宜いんだから！」考——わが黒田喜夫論ノート』、書肆山田二〇〇九、に触発されて本稿は書かれた。ただ、同書は（村）の基底に「種の論理」が見出されるということへの確信を繰り返し打ち固めようとする点に論を集中させており、（村）が現在の状況においてどのように出現しうるのかという点には——いくつか示唆されてはいるもの——踏み込んでいない。とは言え大場氏の黒田喜夫論は現在も進行中であるようなので、今後の展開を待つ必要がある。さしあたって本稿では、そうした（村）または（故郷）を、農村を出自としつつ工場労働者として都市に出、そこで個々に生き、そして死んでゆく人びと（「あんにゃ」をも含めた）が各々に見る幻視という視点から、考えてみたい。と言うのも、大場氏の語用を借りて言えば、「種」および「種」の位相に出現する（村）は、それ自体として実在するのではなく、地理・歴史上の「村」のみならず、心的なそれも含めた意味での「村」を離れた個の生と死に内在するからである。都市でこそ（村）に憑かれる黒田喜夫については、すでに小野十三郎、「空想のゲリラ」をめぐって、前掲『現代詩手帖』は、黒田喜夫にとつての農民や農村が都市において現出する様相を指摘している。この視点は、小野、倉橋健一、野村修が出席した座談会、「田村隆一と黒田喜夫——戦後詩の用語圏と現実」『新日本文学』二二（四）、一九六七年三月、新日本文学会編、新日本文学会、から一貫する。但し、黒田喜夫自身が小野のこの言葉に対して抱いた念は単純ではない。ここでは論じないが、さしあたって、黒田喜夫、『菅孝行との往復書簡——行為の詩と日本近代の意識下の存在（さ）および、岡庭昇との対話「短歌的抒情と共同体」前掲『自然と行為』所収、を参照。
- (5) 黒田喜夫、『彼岸と主体』、河出書房新社一九七二、p. 6。
- (6) 同前、p. 9。
- (7) 同前、p. 9。
- (8) 以上「内すべつ同前」、p. 10。
- (9) 同前、pp. 29-30。
- (10) 帝國による「母語」の変質／構成ならびに「文盲」としての資本主義に関して、本稿

- 註(2)に掲げた拙稿と併せ、ドウルーズ／ガタリ『アンチ・オイディプス』を参照。
- (11) 以上「内すへて前掲『彼岸と主体』p.14。
- (12) この国の「村」における帝國—資本の二重支配構造について、それを後発者に向けてみずから簡明に解く黒田喜夫の言葉が、『彼岸と主体』の難解な記述を辿る上で、参考になった。菅谷規矩雄との対談、「戦後過程の『飢えと欲望』」、「現代の眼」一二六、一七七年六月、現代評論社、を参照。
- (13) 前掲『彼岸と主体』pp.31-32。傍点引用者。
- (14) 三木卓、「共同幻想」からの解放——黒田喜夫『彼岸と主体』、『群像』二七(九)、一九七二年九月、講談社、
- (15) 前掲『彼岸と主体』p.20。傍点引用者。
- (16) 同前、p.36。
- (17) 同前、p.37。
- (18) 同前、p.37。
- (19) 同前、p.66。
- (20) 同前、p.6。本稿註(5)で引いた箇所からの再引用。
- (21) 黒田喜夫、『詩と反詩 黒田喜夫全詩集・全評論集』、勁草書房一九六八、p.121。
- (22) 同前、p.121。
- (23) 同前、p.122。
- (24) 同前、p.121。
- (25) 同前、p.123。
- (26) 同前、p.122。
- (27) 同前、p.122。
- (28) 同前、p.123。
- (29) 同前、p.123。強調引用者。
- (30) 黒田喜夫、「現代詩・状況の底部へ—三 盲目のたたかい」より、前掲『詩と反詩』pp.209-210。
- (31) 同前、pp.210-211。傍点引用者。
- (32) 同前、p.212。傍点引用者。
- (33) 桂秀美、「おとづれ人」の書法——黒田喜夫論、「詩的モダンテイの舞台」思潮社、一九九〇(しかし末尾の註による「あとがき」には「一九九一年八月」とある。なお同書増補新版、論創社、二〇〇九は未確認。
- (34) 黒田喜夫の短歌に対する批判的視角を明瞭に示した文献として、例えば寺山修司との対談「彼岸の唄」、前掲『自然と行為』を参照。
- (35) この点に関して拙稿、「マイナーと福音——(階級)を構成する(委員会)の思考」、「現代思想」三四(七)、二〇〇六年六月、青土社、及び「公理と指令」、小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編、『ドウルーズ／ガタリの現在』、二〇〇八、平凡社、を参照。
- (36) 岡庭昇、「官能のうちなる国家 黒田喜夫を手がかりとして」、前掲『現代詩手帖』、は同様の倒錯論的視座から、道徳的視点から為されるスターリニズム批判に反論し、さら

にそこから、権力に浸透された個々の身体の方へと論点を移して、スターリニズム批判者に往々にして見られがちな、所与の現存する身体を無条件に肯定するのではなく、逆にそこから出発して身体を見出す作業こそが重要だとしている。これは首肯しうる主張であるが、それ以上の展開はなく、問題提起に留まっている。この点に関して、黒田喜夫、「岡庭昇『文学と批評的精神』」、前掲『自然と行為』を参照。ここでの岡庭氏に対する黒田喜夫の評価は、後の岡庭氏の歩みを思うと、意味深長である。

(37) 黒田喜夫、「死は餓えた子供に何ができるか——サルトルらの発言に」、前掲『詩と反詩』pp.183-184。

(38) 同前、p.190。

(39) 菅谷規矩雄、「飢えと美と 黒田喜夫の三つの主題」、「飢えと美と」、イザラ書房一九七五(初出は同書によると『あんかるわ』二一、二二、二三、二四号、一九六八年一月—一九七〇年四月)。

(40) 古賀忠昭、「黒田喜夫さんに短刀を握らせた話」、前掲『現代詩手帖』は「てめえのよいうな奴から体をさわられたら体がくさってしまう、てめえは死体をあさっているのが一番いい」と悪態をつく「あんにゃ」の死体を、にもかかわらず執拗に触発し、そこから「村」或いは(故郷)の観念を立ち上げようとして書き続ける黒田喜夫の姿態を、グロテスクに活写している。

(41) 内村剛介、「飢え—に餓える」、前掲『現代詩手帖』は本稿で見た「内面—とそれを規定する「外部」の関係という視点から、大衆消費社会の登場に伴う黒田喜夫的「革命と詩」という問題機軸の(表見上の)失効を確認した上で、しかしなお、「豊かに「生きる」とときに、ひとは「生きる」ことに餓えている(…)」として、表現が革命に向かう新たな契機を探りあてようとする。同エッセイは、「わたしたちは「飢え」に飢え、別様の「飢えのくびき」の「或る必然」を感じるのだが、そこを突き破って出るトバグちについてはそのありかさえも見つけかねている」と、迷いの中で締め括られているが、この迷いは、大量消費と餓死とが並走する今日から遡及すれば、まさしくその進む方位を探りあてたと言える。